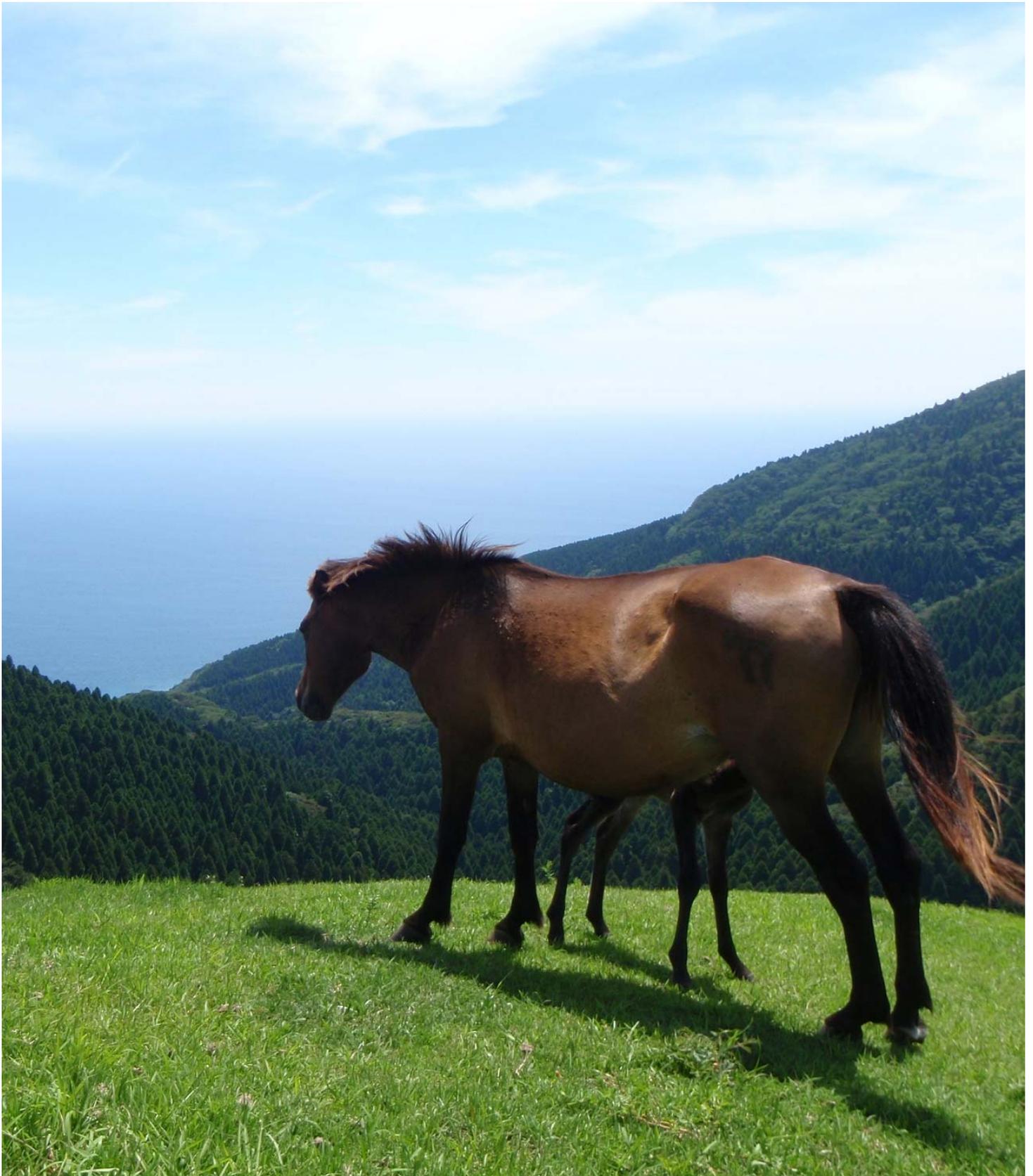




全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol. 34 (Apr. 2018)



第12回全国草原サミット・シンポジウムに向けて

第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会が 開催されます

(ネットワーク事務局)

平成30年5月12日(土)～14日(月)の「第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会」の開催まで、あと一ヶ月少々となりました。会員のみなさまのお手元には既に、大会案内と申込

用紙が届いていることと思います。

ニュースレターでのご案内は、本号が最後となると思います。まだ申し込みをされていない方は、参加をされてはいかがでしょうか。

□サミット・シンポジウムの概要

第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南大会 黒潮洗う野生馬の草原とトロントロンが育む湿原

【開催地】宮崎県串間市、川南町

【開催日】平成30年5月12日(土)～14日(月)

【日程詳細】12日(土)：シンポジウム(基調講演、分科会)(会場)串間市

13日(日)：現地見学会(都井岬(串間市)及び川南湿原(川南町))
交流会(会場)川南町

14日(月)：シンポジウム及びサミット(会場)川南町

【12日 シンポジウム 串間市】

13:00 開会・基調講演

野焼きが育てた日本文化

(永松 敦氏/宮崎公立大学教授)

宮崎の草原湿原と植物多様性の現状

(南谷忠志氏/宮崎植物研究会会長)

15:00 分科会

第1分科会：草原・湿原環境と生物多様性

第2分科会：草原環境と持続可能な観光活用

第3分科会：草原と人の生活文化

第4分科会：保全活動の継承と安全対策

17:00 全体会

18:30 閉会

【13日 現地見学会】

9:00 都井岬

(岬馬およびその繁殖地)

14:30 川南湿原植物群落

18:00 交流会

【14日 サミット 川南町】

湿原シンポジウム：

9:00 開会・講演

草原の秘密：野草堆肥の活用で安全・安心・高品質の農産物を！

(染谷 孝氏/佐賀大学教授)

10:25 事例発表・パネルディスカッション

川南湿原の保全活動について

北川湿原の保全活動について

和石地区の保全活動について

11:50 講評

草原サミット：

12:30 開会(活動報告、問題提起)

14:40 サミット宣言採択

15:00 閉会

□現地見学会の紹介

<都井岬>

宮崎県串間市の最南端に位置する都井岬は、江戸時代初期から高鍋藩の牧場が開かれ、軍馬の生産が行われていました。その当時から続く馬が野生化をしたものが国指定天然記念物の岬馬です。



現在、約550ha（純草地は約50ha）の面積に、およそ110頭の岬馬が周年自由放牧・自然繁殖で生息しています。



<川南湿原>

川南湿原は、宮崎県川南町のほぼ中央部の新橋地区にあります。昭和49年に国指定天然記念物に指定されました。希少な植物が多くみられます



が、中でも、絶滅とされていた川南湿原の固有種「ヒュウガホシクサ（下の写真）」が約50年ぶりに復活し、注目を集めています。



宮崎県串間市の草原

（河野円樹：宮崎県在住）

宮崎県の最南端に位置する串間市は、江戸時代から高鍋藩秋月氏により軍馬の生産が盛んに行われていた地域で、現在も都井岬をはじめとする牧（まき）の名残を見ることが出来ます。鹿児島県志布志市と宮崎県串間市の境に位置する笠祇山（標高 444.2m）周辺にも、笠祇地区・古竹地区という牧として草原を維持管理してきた地域があります。この2地区では、地元住民の入会地として集落の周辺に草原が維

持されており、現在は馬ではなく牛の生産のため、飼料用に草の刈り取りが行われるほか、毎年2月頃には耕作地周辺の害虫駆除を目的に、地元住民総出で野焼きが行われています。尾根や谷を含む多様な地形が草原状になっており、耕作地周辺の比較的草丈の高い草原から、尾根上の比較的貧栄養な草原まで多様な環境が広がっています。また、長年にわたり草原として維持されてきたため、南方系の植物や



丈のチガヤが収穫出来ることに職人の方も驚かされていました。ススキに比べ、チガヤはしなやかで、乾かしたものを束ねて立てかけるだけでも十分な屋根になるそうです。かつては温暖な地域では、取り扱いが簡単なチガヤも茅葺きに使われていたそうですが、今やその伝統も失われつつあるようです。茅葺き職人の方達は、その日本のチガヤでの茅葺きの建物を兵庫県で開く企画展で製作することを検討しているとのこと。古竹地区の草原は、現在は地元の住民だけが

大陸系の遺存植物をはじめ現在では見る機会が少なくなった草原性植物が生育しています。優占する種類はイネ科のチガヤやススキです。

今年、関西の茅葺き職人の方から、チガヤの刈り取りができる場所の情報提供の依頼があり、古竹地区を紹介させていただきました。チガヤ草原は河川堤防など身近にあるものの、茅葺きに適した草丈の長いものは少ないということでした。そこで、平成30年1月28日(土)に、茅葺き職人の方に古竹地区に来ていただき、地区の許可を得たうえでチガヤの刈り取りを行いました。耕作放棄された畑の畔に丁度適したチガヤがあったため、軽トラック一台分のチガヤを刈り取っていただきました。刈り取ったチガヤは丈が2mほどもあり、東南アジアなどでみられるものに似ているとのことで、日本で類似の草

利用している状況ですが、今後、こうした伝統的な茅葺き技術の伝承にも役立つということになれば、新たな草原の利活用につながっていくかもしれません。



各地からの報告

すすきのほうきづくり

(和田譲二：島根県在住)

島根県大田市の NPO 法人緑と水の連絡会議は 3 月 11 日に「すすきのほうきづくり」ワークショップを開催しました。

毎年開催する国際ワークキャンプでは、三瓶山西の原の野焼き防火帯を整備するボランティア作業をしていますが、今回は野焼きで燃やす前のすすきの穂だけをたくさん集めてきました。皮を剥がして軸だけにして綿毛をとる準備作業に手間がかかりましたが、これをタコ糸でくくって箒をつくる手法は、筑波大学芸術系（農閑工芸）の院生と OB の箒職人

を講師に招いて学びました。

当日は市内外から小学生からシニアまで 30 名の参加があり、それぞれ個性的な手帯を各自 2 本ずつ完成させました。

昔の人々はこうやって作っていたのでしょうか。身の回りをかたづけるちいさなツールを自分で作って愛着を持つという取り組みは共感を得やすいと思いました。環境系 ESD として広めていきたいプログラムです。



改良草地：その更新の様子と植物の生育に対する影響

横川昌史（京都府在住）

改良草地（人工草地）は地面を耕して、牧草の種子をまき、肥料をやったりして外来牧草を導入した草地のことです。一般的な言葉としては牧草地という呼び方の方がなじみ深いかもしれません。畜産の盛んな地域では、牛や馬のエサとして栄養価の高い牧草の増産を目的に改良草地（人工草地）が作られてきました。野生植物の生育地である半自然草原が耕されて改良草地に変えられてきた場所も少なくありません。牧草の成長が悪くなってくると、改めて地面を耕して牧草の種子をまいて改良草地を作りなおすことがあります。改良草地を作りなおすことを「更新」と呼びます。更新の様子を図 1 に示しましたが、現在も積極的に利用されている改良草地は図

のような感じでときどき更新されます。地面を耕して種子をまくので草原や草地というよりは牧草の「畑」です。改良草地（牧草地）の地図記号は畑と同じブイの字マークが使われます。

改良草地は半自然草原と異なり地面を耕して肥料や牧草の種子をまくので野生植物はほとんど生えられません。一見すると草原のように見えても私たちにとってなじみ深い半自然草原とは全く異なるものです。また、阿蘇地域では改良草地を更新せずに野焼きや放牧などを続けている場所があります。そのような「元改良草地」では在来植物の量が多く、半自然草原に戻りつつあるように見えますが、生育している在来植物の種類数は少ないことがわかってき

ました (図 2)。図 2 の「草地改良あり」は 40~50 年ほど前に半自然草原が改良草地に改変された後、更新されずに野焼きや放牧を続けてきた場所で、「草地改良なし」は改良草地にされずに野焼きや放牧を続けて半自然草原として維持されてきた場所です。調査された場所は互いに隣り合っており、現在はこちらも火入れと放牧によって管理されています。管理方法が同じであっても、過去に土壌が改変されている「草地改良あり」には生育できない植物がいることがわかります。このことは改良草地を作る際に土壌をいじってしまった場所では、様々な在来植物が生育する草原の再生が困難な可能性を示しています。

牧草を育てるという視点で「改良」草地という名

前が付けられていますが、生物多様性保全の視点からは良いことはあまりないようです。改良草地が多い地域では、草原の保全活動のなかで改良草地や「元改良草地」の存在も考慮して活動を進めていく必要があるでしょう。

引用文献

横川昌史・佐藤千芳・高橋佳孝 (2017) 過去の草地改良が草原植生に与える影響：阿蘇地域での一例。地域自然史と保全 39(2):113-119.

※上記の論文を読みたい方は yokogawa@mus-nh.city.osaka.jp までご連絡ください。PDF ファイルをお送ります。



図 1. (a) 改良草地を耕起中の様子 (2014 年 9 月 11 日撮影)。耕起したてなので一面に黒っぽい土が広がっているのがわかる。写真の右中央には耕起中のトラクターが見える。(b) 耕起後、一ヶ月後の様子 (2014 年 10 月 16 日撮影)。(a)と同じ場所から撮影。播種した牧草が発芽し一面が黄緑色に見える。いずれの写真も熊本県阿蘇市一の宮町三野で撮影。

植物種	草地改良あり		草地改良なし		
	平均被度	出現頻度	平均被度	出現頻度	
ネザサ	62.9	1.0	78.1	1.0	} 元改良草地 で再生可能
トダシバ	23.6	1.0	6.1	0.9	
ミツバツチグリ	2.0	0.9	6.0	1.0	
ネコハギ	2.0	0.8	1.0	0.9	
ウツボグサ	} 生育なし		1.1	0.8	} 元改良草地 で再生不可
リンドウ			0.4	0.8	
オカトラノオ			0.3	0.7	
ウメバチソウ			0.3	0.7	
センブリ			0.3	0.7	

図 2. 阿蘇地域における「元改良草地」で生育できる植物とできない植物。平均被度が大きいほど調査地内でその植物の量が多いことを、出現頻度が大きいほど調査地内でその植物がよく見られることを示す。横川 (2018) の表 1 から植物種を抜粋して作図。文献引用等を行う場合は必ず原典を確認してほしい。

全国草原リレー（第17回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第17回

は、理事でもある真庭遺産研究会の徳永氏に、最近の取り組みについて紹介して頂きます。

みんなで考えよう『蒜山の山焼き』

（徳永 巧：真庭遺産研究会／ネットワーク理事）

蒜山地域（岡山県真庭市の北部）では、今なお、地域住民による「山焼き」により、草原風景が維持されている。真庭市の資料によると2000年代になってもその面積は67ha程度あるとされているが、1940年代に1,200haの面積（鳥取大学農学部森林生態系管理学研究室資料）で山焼きが行われていたとされていることから、蒜山地域の山焼きも以前に比べ激減している。

とは言っても、蒜山地域のように昔ながらの慣習のもと、地区住民が春の風物詩として山焼きを行っている地域は全国的にも珍しく、まさしく、「蒜山に広がる草原の風景は、地域の人々が暮らしの中で続けてきた『山焼き』や採草によって守られてきまし

た。」であり、文化庁のいう「重要文化的景観」そのものである。

真庭遺産研究会では、これまで中越信和先生や佐野淳之先生らの協力のもと、蒜山地域の草原を重要文化的景観に選定し、地域資源として保全と活用を進めようと勉強会や見学会を開催してきたが、今ひとつ活動不足で前に進めることができていない。

「みんなで考えよう『蒜山の山焼き』」は、環境省中国四国地方環境事務所が「平成28年度大山隠岐国立公園草原景観保全に係る普及啓発業務」の一環で2017年3月に制作した蒜山地域山焼き普及啓発資料（高校生向け）のカラー版冊子の表紙タイトルである。また、事務所では、「蒜山地域山焼き講習会テキスト」も作成しており、指導者研修会も開催している。蒜山の草原や山焼き作業についてはこれら冊子やテキストでわかりやすく紹介されていて、われわれの活動にも活用できるものである。



希少な野生生物が多く生息する延助の草原



山焼きボランティアが行われている草原



みんなで考えよう

『蒜山の山焼き』

高校生向け

一方、冊子には「蒜山地域は過疎高齢化が進んでおり、現在の体制では山焼きの後継者が少なくない、現在の草原景観を維持することが難しい状況です。」とも記されており、草原景観維持のために「山焼きボランティア」など新しい仕組みづくりについても問いかけている。とりわけ、延助地区の山焼き草原は、フサヒゲルリカミキリやサクラソウなどの希少な野生生物の生息生育地であるが、地区住民による山焼きの継続が困難となっていることから、草原維持の山焼き活動に関心の高い有志でつくられた「山焼き隊」などの山焼きボランティアの活躍にも期待が寄せられている。

そして、これまで天王地区の草原で山焼き活動を行っていた佐野淳之先生もこの春に鳥取大学を退官されるが、佐野先生とは以前より茅葺き民家の移築再生の事業を進めており、茅葺き民家の再生に使用する屋根材（茅）の確保などで退官後も大山蒜山地

域での活動をともに行う計画である。

この屋根材（茅）の確保を進めるにあたり、これまで草原環境の保全と活用などで協力関係にあった湯船地区の住民や自然体験活動などで関係のある熊谷地区、白髪地区の住民と草原景観の活用など話しをする場を設けたいと考えている。



環境省実施の山焼きボランティア指導者研修会

草原をめぐる動き（2018年4月～2018年7月）

- 4/1 蒜山の草原を守ろう（山焼きボランティア）（場所：岡山県真庭市、連絡先：津黒いきものふれあいの里）
- 4/8 深入山山焼きまつり（場所：広島県山県郡安芸太田町、連絡先：安芸太田町商工観光課）
- 4/14 雲月山山焼き（場所：広島県山県郡北広島町雲月山、連絡先：雲月山山焼き実行委員会）
- 4/21 千町原の低木伐採（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 4/29-30 春の風物詩・上ノ原茅場の野焼き（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 4/28, 5/13, 5/19 乙女高原のスマレ観察会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

- 5/6 サクラソウの観察会（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 5月上旬 小清水原生花園「火入れ」（場所：北海道斜里郡小清水町、連絡先：小清水町役場）
- 5/13 乙女高原の遊歩道づくり（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 5月下旬 藤原の山菜を楽しむ（茅株移植も同時開催）（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 7月中旬 防火帯刈り（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

※前号の8ページで、山内康二氏をネットワーク理事としていましたが、ネットワーク副会長の間違いでした。お詫び申し上げます。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 34 2018年4月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】「第12回全国草原サミット・シンポジウム in 串間・川南（宮崎）大会」が、1ヶ月後に迫りました。ネットワークの会員からも、大会への参加をお願いします。